

子宮頸がんワクチン（HPV）予防接種に関する説明書

<子宮頸がんについて>

子宮頸がんは、子宮の入り口部分にできるがんです。子宮頸がんになると子宮やその周りの臓器を摘出しなければならないことがあります。妊娠や出産の問題はもちろん、その後の生活や命そのものにも重大な影響を及ぼす危険な病気です。

日本では婦人科領域の悪性腫瘍の中で、乳がんに次いで多いがんです。年間約 10,000 人が罹患し、その内約 3,000 人が亡くなっています。

子宮頸がんの原因のほとんどは、ヒトパピローマウイルス（HPV）感染によるものです。皮膚と皮膚（粘膜）の接触によって感染するウイルスで、多くの場合、性交渉によって感染すると考えられています。

女性の 50%は一生の内に一度は感染するといわれていますが、感染は一時的で自然消失するのがほとんどです。

しかし、免疫力の低下等により感染が長期化すると子宮頸がんへと進む危険性があります。

1. 子宮頸がんワクチンについて

HPV は 200 種類以上確認されており、その内約 15 種類が「がん」との関連が指摘されています。現在、HPV の感染に起因する疾患の予防ワクチンは以下のとおりです。

ワクチンの種類	予防効果のある HPV の種類	子宮頸がんの原因を予防できる範囲
シルガード9	16 型、18 型、31 型、33 型、45 型、52 型、58 型（高リスク型） 6 型、11 型（低リスク型）	81.0～90.7%

※高リスク型は子宮頸がんなど、低リスク型は尖圭コンジローマ等の原因

ワクチンを接種することにより、再感染や持続感染を予防して、がんになるリスクを低減することができます。感染する前の接種が効果的です。

※すでに感染している HPV を排除したり、がんの治療をしたりする効果はありません。あくまでも接種後の HPV 感染を予防するワクチンです。

※すべての発がん性 HPV を予防できるものではありませんので、接種しても発症する可能性はあります。

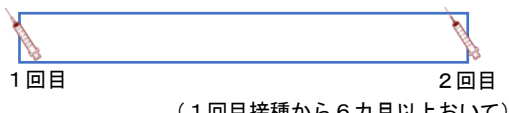
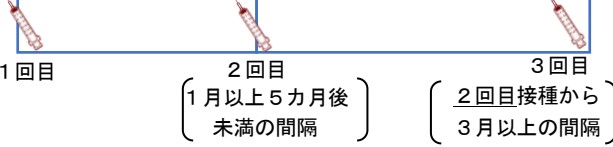
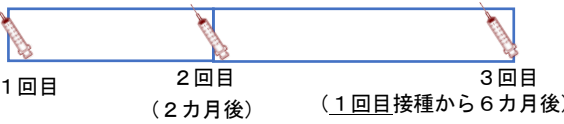
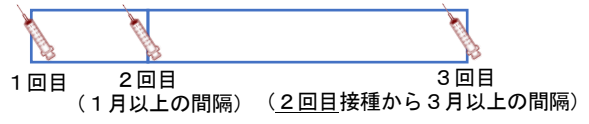
また、ワクチン接種をしてもがん検診の年齢に達したら「がん検診を定期的に受診する」ことが大切です。

2. 交互接種について

同じ種類の HPV ワクチンで接種を完了することを原則としますが、交互接種における安全性と免疫原性が一定程度明らかになっていることや海外での交互接種に関する取扱いを踏まえ、すでに「サーバリックス」又は「ガーダシル」を用いて定期接種の一部を終了した者が残りの接種を行う場合には、適切な情報提供に基づき、医師と被接種者等がよく相談した上で「シルガード9」を用いて定期接種してください。

※「サーバリックス」「ガーダシル」は、令和 8 年 3 月 31 日まで定期接種で使用していたワクチンです。

3. ワクチン接種スケジュール

		標準的な接種方法	標準的な接種方法をとることができない場合
シルガード9	15歳未満で1回目接種 (15歳の誕生日の前日まで)	 <p>1回目 2回目 (1回目接種から6カ月以上おいて)</p> <p>6月以上の間隔をおいて2回行う。 (2回目の注射は1回目の注射から少なくとも5月以上の間隔をおいて行う。)</p>	 <p>1回目 2回目 3回目 (1月以上5カ月後 未満の間隔) (2回目接種から3月以上の間隔)</p> <p>2回目の接種が1月以上5月後未満の間隔となった場合、2回目の注射から3月以上の間隔をおいて1回行う。</p> <p>※2回目の注射が1回目の注射から1月以上5月後未満の間隔となった場合、3回目の注射を行うこと。この場合、3回目の注射は2回目の注射から少なくとも3月以上おいて行います。</p>
	15歳以上で1回目接種	 <p>1回目 2回目 3回目 (2カ月後) (1回目接種から6カ月後)</p> <p>2月の間隔をおいて2回行った後、1回目の注射から6月の間隔をおいて1回行う。</p>	 <p>1回目 2回目 3回目 (1月以上の間隔) (2回目接種から3月以上の間隔)</p> <p>1月以上の間隔をおいて2回行った後、2回目の注射から3月以上の間隔をおいて1回行う。</p> <p>※2回目の注射が1回目の注射から3月以上の間隔となった場合、「標準的な接種方法をとることができない場合」に該当しますので、2回目から3回目は3月以上おいて行います。</p>

※交互接種のスケジュールについて

「サーバリックス」または「ガーダシル」で接種を開始し、定期接種として「シルガード9」で接種を完了する場合は「シルガード9」の接種方法に合わせて行います。
(「サーバリックス」及び「ガーダシル」との交互接種となる場合は、3回接種します。)

4. 副反応について

接種は筋肉注射になります。ワクチン効果を高める為、アジュバント(免疫増加剤)が添加されており、**痛み・赤み・腫れなどの接種部位の反応があります。**体内でのウイルスに対しての免疫反応です。通常数日で治ります。主な副反応は以下の通りです。

頻度	シルガード9
10%以上	注射部位の痛み・赤み・腫れ
1~10%未満	発熱、注射部分のかゆみ・出血・熱感・しこり・知覚消失、頭痛、感覚鈍麻、悪心
1%未満	手足の痛み、腹痛、下痢
頻度不明	無力症、悪寒、疲労、倦怠感、内出血、血腫、硬結、失神、浮動性めまい、関節痛、筋肉痛、嘔吐、リンパ節症、蜂巣炎、インフルエンザ、口腔咽頭痛

※まれに重い副反応としてショック・アナフィラキシー様症状があらわれることがあります。

※健康被害救済制度について

定期の予防接種によって引き起こされた副反応により、医療機関での治療が必要になったり、生活に支障が出るような障害を残すなどの健康被害が生じた場合には、予防接種法に基づく給付を受けることができます。

ただし、その健康被害が予防接種によって引き起こされたものか、別の要因によるものかの因果関係を専門家からなる国の審査会にて審議し、予防接種によるものと認定された場合に給付を受けることができます。

※ HPV ワクチン接種後に持続的な疼痛が特異的にみられたことから平成 25 年度より積極的勧奨を差し控えておりました。

国の調査会においてワクチンの安全性に特段の懸念が認められないことが確認され、接種による有効性が副反応のリスクを上回ると認められ、令和 4 年 4 月から積極的勧奨が再開されております。

ワクチンの接種を受けた後に、広い範囲に広がる痛みや、手足の動かしにくさ、不随意運動（動かそうと思っていないのに体の一部が勝手に動いてしまうこと）などを中心とする多様な症状が起きたことの報告がありますが、この症状は専門家によれば「機能的な身体症状」（何らかの身体症状はあるものの、画像検査や血液検査を受けた結果、その身体症状に合致する異常所見が見つからない状態）であると考えられています。HPV ワクチン接種歴のない方においても、HPV ワクチン接種後に報告されている症状と同様に「多様な症状」を有する方が一定数存在することが明らかとなっております。このような「多様な症状」の報告を受け、様々な調査研究が行われておりますが、「ワクチン接種との因果関係がある」という証明はされていません。

5. 予防接種の注意事項 **※予防接種は体調の良いときに受けることが原則**です。

＜接種前の一般的注意事項＞

◎接種の予約については、かかりつけ医にご相談ください。

①予防接種の効果や副反応、健康被害救済制度について理解した上で接種をお受けください。

わからないことがある場合は接種を受ける前にご相談ください。

②予診票は接種をする医師への大切な情報ですので、責任を持って記入してください。

③妊娠中の接種に関する有効性・安全性は確立していないことから、妊娠の可能性のある者には接種を行わないことが望ましいとされています。

④母子健康手帳を必ずお持ちください。

＜接種後の一般的注意事項＞

①接種後 30 分は急な副反応がみられることもありますので、接種会場で様子をみてください。

②入浴は差し支えありませんが、接種部位はこすらないようにしましょう。

③接種当日は、はげしい運動は避けてください。

令和 8 年度

茂原市長生郡医師会

長柄町 福祉課

問い合わせ：長柄町 福祉課 TEL：35-2414